

神様なんていないと言っている人は、世の中の苦しみをよくわかっている人だ。でももし本当に神様がいたなら……そんな事を考えてもう何年経っただろう。もちろん未だに神様は俺の前に現れてくれない。恐らくこれから先もずっと……

その日は突然やってきたというフレーズを、人は何かを語る時によく使う。でもそんなフレーズをのうのうと使える奴は幸せ者だけだろう。そうでない人間にとつては、起きた突然に絶望するしかない。俺はいつものように母親に見送られ、自転車に乗って学校に行く。遅刻しないよう、いつものように自転車は猛ダッシュ。いつものように大通りを通り、郵便ポストのある角を曲がって行く。そしていつものように、猛スピードの車に跳ね飛ばされる。

暗い。何も見えない。光をさがしてもがき回る。でもどこにも光は無い……

そして自分が夢を見ていたと気づく。もちろんいつものように。

当時の俺は中学一年生。夏休みが終わり、二学期の始業式が始まる日だった。俺は学校の登校中に交通事故に会い、猛スピードの車に跳ね飛ばされた。まるで映画のワンシーンのように宙を舞ったらしい。でも問題はその後だった。俺は運悪く、頭から地面にぶつかり、たまたまそこにあつたコンクリートの破片に両目を強く打ちつけたのだ。病院のベッドで意識が戻った時には、何が起つたのか理解できなかった。唯一わかつたことは、光を感じられないこと……

なんで俺が……
それ以外の言葉が見つからなかった。俺の両目は事故による外傷で完全に視力を失っていた。そう、失明したのだ。事故の責任者であるドライバーというと、俺を跳ねた後も暴走を続けたらしく、しまいには大型ダンプと接触して死んでしまった。血中からはかなりのアルコールが検出されたらしい。

最初は周りの人全員が心配してくれた。病室には多くの人が訪れ、あれやこれやと見舞いの品を届けてくれる。同級生も何人かやってきて、学校の近況を話してくれた。でも病室を訪れたやつのはほとんどが、帰る頃には何も話せなくなっていた。そして病室を去った後、誰もが同じ感情を抱いただろう。(かわいそうに……) 彼らに残った感情は、知らないうちに同情だけになっていた。でもそれも当然と言えば、それまでなのだろう。彼等には彼等の人生があり、俺の事をずっと気にしている訳にはいかないからだ。時間は決して人を待つてはくれないのだから……

俺はもう二度と光を見ることはできない。友達と一緒に映画を見に行ったり、大好きだったゲームをすることもできない。自転車に乗ってきれいな景色を見に行くことも、違うクラスにいる好きな女の子を見ることも。そう、何もかも……

あれから二年が経ち、俺の周りの事情は大きく変わった。俺は病院を退院してすぐに、両親の勧めで視覚障害者の学校に入学した。そこでは駅から学校までの道のりを覚えたり、白杖というス

テッキを使って歩行訓練をしたりと、失明する前には普通にできていたことを、一からやり直させられた。またそれだけではなく、できないと思っていたスポーツや、漢字の資格検定を受けたりもした。まだ全てではないものの、日に日にできることは増えており、生活もずいぶんと楽になってきた。しかしまだ完全に現実を受け入れていくわけではなかった。暗闇にいる自分にとっては、どうしても光の世界を望んでしまうからだ。

そして今日もあの夢を見て眠りから覚めた。うなされていたらしく、シャツは汗でぐっしりと濡れていた。時間が経ったとは言え、未だにあの事故の夢だけは繰り返し見る。ただ俺は決してこの夢が嫌いなわけじゃない。なぜなら俺は夢の中のみ、しっかりと光を見ることができからだ。

しかしこんな日にもあの夢を見るとは思わなかった。なぜなら俺は今学校の集団宿泊学習に来ており、今日はその初日だったからだ。くたくたに疲れた俺はぐっすり眠っているつもりだったのだが……俺が額の汗を手で拭おうとすると、突然だれかが俺に話しかけてきた。

「たかし。おい、たかし大丈夫か？」

不意に声をかけられ、俺はあたりを見回す仕草をする。

「俺だよ！おい！」

話しかけてきたのは同じ視覚学校の友達の亮太だった。彼は生まれつき全盲でありながら非常に社交的な人間であり、入学して一番最初に仲良くなった友達だ。

「ごめん。起こしたか？」

「いや別に大丈夫だけど、お前明日山登りなんだから、しっかり寝といたほうがいいぞ」

そう言うとき亮太は再び眠りについた。俺は何とか眠ろうとしたものの、結局起床の時間まで起きていることになった。

宿泊学習二日目の朝になるとみんなで外に集まり、登山の講習を受けた。この行事は学級が三年生になると行われるもので、プロのインストラクターも一緒に行動する大掛かりなものだ。俺は虫が大の苦手な、登山に挑むにあたってはそれだけが心配だった。昔はそれほどでもなかったのだが、失明してからは異状に気持ち悪く感じるようになっていた。

出発を知らせる笛が鳴り、いよいよ登山が始まる。俺は前にいる教師のリュックを掴み、ステッキを使って安全を確かめながら前に進んだ。予定では二時間かけて頂上にたどり着く。そして二十分程経った頃、後ろにいた亮太が話しかけてきた。

「たかし、昨日は結局寝たのか？」

「いや、あれからずっと起きてた」

「バカだなあ。じゃあお前、今日は疲れて登りきれないんじゃないか？」

「別にそんなことねえよ。逆にお前より元気がないだよ！」

そう強気な発言をしたのには理由があった。俺は小学校からサッカーをしていた影響もあり、体力だけには自信があったのだ。失明してからもその衰えは感じられなかった。しかし俺は自分でも予期しなかった理由で、登山を断念することになる。

それは登り始めてから一時間が経ち、そろそろ休憩にさしかかる頃だった。俺はステッキで自分の前を確認していたが、険しい山道では全ての危険に対応しきれなかったのだ。俺は小さな石を踏んだ途端、いきなり体勢を崩して前のめりに倒れ込んでしまった。

「たかし大丈夫か！？」

「だっ大丈夫です」

先生がすぐにそばに寄ってくる。けがはほとんど無かったが、立ち上がる時左手に違和感を感じた。なにか丸っこいものが潰れた感覚。左手を右手でよく確かめてみる。

虫だった……それがわかった途端、胃の中の朝食が全部押し上げてきた。

「うっ、誰か吐いたのか？」

周りの同級生が思わず声を上げる。

「おい、どうしたんだ！」

「ちよつと、気持ち悪くなって……」

「と、とにかくお前はもう山から下りて安静にしといたほうが良い」

「……………」

俺は先生の意見を無視して何度か頂上まで登ろうとした。しかし足がふらついてまともに歩くことすらできなかった。それは俺の中になぜか、恐怖が芽生えていたからだ。もちろんその恐怖は虫を潰しただけで芽生えたのではない。前のめりに倒れた時、事故の記憶とそれが重なったのだ。事故で潰れた目と、自分のせいで潰れた虫。そして見えない事への恐怖。なぜそれらが繋がったのかはわからない。でもそれらはある日突然繋がってしまったのだ。

その夜は眠るのが怖かった。今まで眠る時間は、夢の中で自由に光を見れる時間だったのに。それにあの登山のトラウマが頭から離れないでいた。

「おいたかし、今日はどうしたんだよ？頂上はすぐよかったんだぞ。」

隣のベッドにいた亮太が話しかけてくる。

「えっ、ああ。やっぱり昨日の疲れが出たのかもしれない」

「本当にそれだけか？なんか、もつと辛そうな感じに思えたけど」

「うん。ちよつとな……」

一瞬気まずい空気が流れた。いつもならそこで会話は終わっていたが、なぜか亮太は話を続けようとしていた。

「話してくれよ。何が辛かったのか」

俺は正直こんな話はしたくはなかった。でも亮太はなぜか今日に限って、しつこく俺の事を聞いてきたのだ。初めは俺も亮太の反応を窺いながら話をした。しかし長い時間が経って気づいてみると、率先して悩みを打ち明ける自分がいた。今日の登山のトラウマ。暗闇が怖いこと。事故の夢をよく見ること。夢の中での自分のこと。失明してから悩んだこと。自分でも変だと思ふことでも、隠すことなく全て打ち明けた。それでも亮太は一言も変だと言わなかった。むしろ真剣に……今までで一番真剣に、俺の話を聞いてくれた。自分も悩みを話し切ると、少し肩の荷が下りたような気がしていた。

そしてずつと静かに話を聞いていた亮太が、ゆつくと悩みを語りだした。

「俺さあ、この間病院に行ったんだ」

「病院？」

そんな話を聞いたことがなかった俺は、亮太が何か深刻な病気にでもなったのかと考えた。

「どこか、体の調子が悪くなったのか？」

「いや、そうじゃなくて……その逆だ……」

亮太がそう言った瞬間、俺はまさかと思った。そして俺の予想は的中した。

「もしかして、目が見えるように？」

「うん……新しい治療方ができて、その手術を受けたら見えるようになるって先生が……」

それはまさしく突然の宣告だった。俺は嬉しく思ったのと同時に、彼に対する恨めしい感情も抱いた。自分で自分を情けないと思っても、その感情だけはどうすることもできない。でも少し引かかる所があった。なぜなら一番喜ぶべき人物が、そうでなさそうに思えたからである。

「なんで、あんまり嬉しそうじゃないんだ？」

「実は、怖いんだ。見えるようになるのが……」

「えっ!？」

思いもよらない言葉に度肝を抜かれる。どうやったらそう思えるんだ？見えるということほど、素晴らしいことは無いというのに。

「最初は俺も嬉しかったんだ。でも、現実の世界が自分の想像と違っていると思うと……」

「言っていることがよくわかんねえよ！俺だったら絶対はその手術を受けるよ！」

多少の苛立ちで、少し声を荒げてしまふ。しかし亮太も先程より強い口調で言葉を返してきた。

「俺だっで見えたら良いと思うさ！そんなの当たり前だろ！でも……」

「でも何だよ！」

「お前だっ綺麗なものばかり見てるわけじゃないだろ？お前は見えない虫だっ不快に思っているんだ！そんな不快なモノが見えるようになったら……ましてや人間を……お前を不快なモノとして見ちまったら、俺どうしたらいいんだよ！」

見えてはいないが、亮太のまぶたから大粒の涙が出ているのがわかる。こいつは今、見えることへの恐怖と戦っているのだ。

「もし、もしお前が見たくないものを見ないといけなくなったら、その時は……」

「その時は？」

鼻水をすすりながら、亮太はしわくちゃな声で俺の答えを聞いてきた。

「その時は、目をつぶったらいいい。目をつぶっていても……光が見えなくても生きていけるように、俺たち頑張ってきたじゃないか！」

何も考えず、咄嗟に言ってしまった。でもそれが俺の答えの全てだった……

それから十年後

俺は山岳ガイドと共に山を登っていた。中学校の登山で苦い思いをしたので、まだ恐怖心が少し残っている。相変わらず虫も苦手である。しかし俺には今、信頼できる仲間がいる。俺の踏み地面をしっかりと見てくれ、ゴールまで背中を支えてくれる仲間が。

体中汗だくになって頂上に着く。この山も、もう百回以上登っただろう。何度来ても飽きることはない。風の爽やかさも、野鳥の鳴き声の違いも、山のことは全部教えてもらった。そして俺が感じるこのできないことも。

「おい、今日はどんな景色が見える？」

「今日はちよつと霧が出てるけど、相変わらずでかい山が連なって見えるな。いつも通り、綺麗だぞ」

「そうか、そりゃよかったな」

「お前はどんな感じだ？」

「俺か？俺はなあ、頭の中できれいな景色を見てる亮太が見えるな……」

終わり